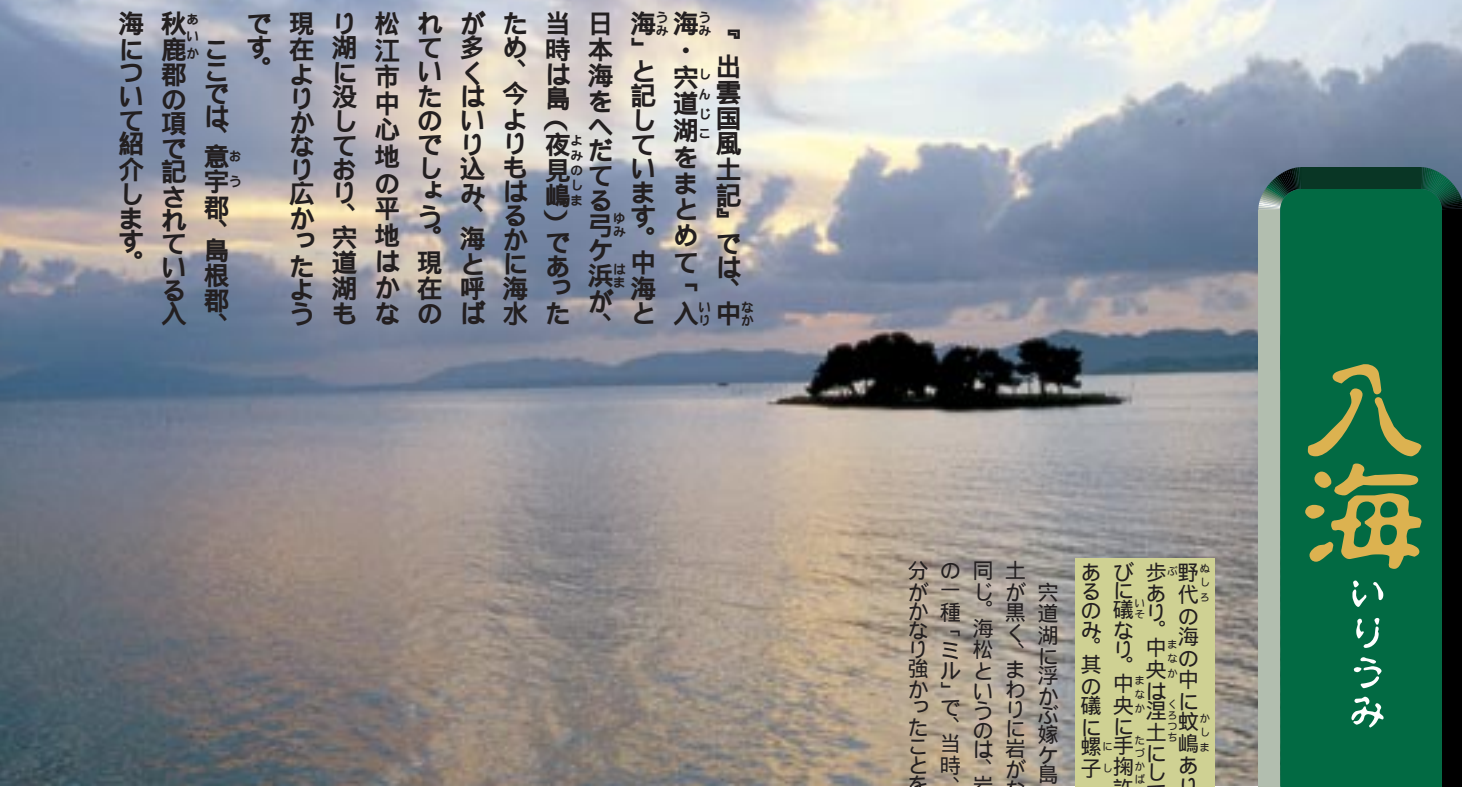


入海

いりうみ



野代の海の中に蚊嶋あり。周り六十歩あり。中央は泥土にして、四方は並びに磯なり。中央に手掬りの木一株あるのみ。其の磯に螺子・海松あり。

穴道湖に浮かぶ嫁ヶ島である。島の土が黒く、まわりに岩がないのは今も同じ。海松といつのは、岩に付く海藻の一種「ミル」で、当時、穴道湖の塩分がかなり強かったことを示している。

『出雲国風土記』では、中海・穴道湖をまとめて「入海」と記しています。中海と日本海をへだてる弓ヶ浜が、当時は島(夜見嶋)であったため、今よりもはるかに海水が多くはいり込み、海と呼ばれていたのでしょう。現在の松江市中心地の平地はかなり湖に没しており、穴道湖も現在よりかなり広がったようです。

ここでは、意予郡、島根郡、秋鹿郡の項で記されている入海について紹介します。

邑美冷水。東西北は山にして並びに峻嶒しく、南は海にして瀟漫がり、中央には園あり、麓磯々し。男も女も老いたるも少きも、時々に糞り集ひて常に燕會する地なり。

松江市大海崎町にある目無水。今も大量の水がわき出ていて、大井町、大海崎町に飲料水を供給している。老若男女がいつも集まって宴會をしていたとある。



目無水(松江市大海崎町付近)

松江市矢田町、国道九号線を通ると、大橋川に手間天神社がある島が見える。木々がつつそうと茂るこの島がそれだ。



国道9号線から手間天神社を望む。

朝酌海。廣さ八十歩許あり。國麿より海邊に通ふ道なり。

朝酌海は、後章(二三ページ)を参照。前原崎。東西北は並びに峻嶒しく、下には則ち陂あり。周り二百八十歩、深

さ一丈五尺許あり。三つの邊には草木自ら涯に生ひ、鷺鷥・鳧・鴨、隨時の常に住り、陂の南は海なり。即ち陂と海との間は濱にして、東西の長さ一百歩、南北の廣さ六歩あり。肆松翁鬱り満園湖澄めり。男女時に隨りて燕會ひ、或るは偷樂みて歸り、或るは歌遊きて歸ることを忘れ、常に燕會する地なり。



大海崎町間の内付近。大山はもちろん、京羅木山・星上山が望める。

松江市大海崎町の海辺。風光明媚な地で、当時の人びとが集まっていた酒宴を開いた様子が描かれている。

和多々嶋。周り三里二百二十歩あり。椎・海石・白桐・松・手菜・齊頭高・膝・都波・猪・鹿あり。陸を去るに、渡り一十歩なり。深き淺きを知らず。

美保関町下宇部尾の和田多鼻。現在は陸続きで半島となっている。



上空から美保関町森山方面を望む。写真の右外れに岡鼻がある。

門江濱。伯耆と出雲との一國の堺なり。東より西に行く。

現在の安来市吉佐町、門生町あたりの海岸である。出雲国と伯耆国の境で、入海の入口に面していることから、弥生時代には見張りのために集落(陽徳遺跡)が山の上に作られた(詳しくは二巻を参照)。現在は埋め立てにより、湖岸はかなり前進している。



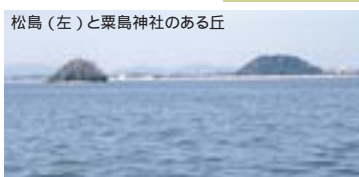
陽徳遺跡上空から中海方面を望む。

子嶋。既に磯なり。

安来市後山沖の松島

粟嶋。椎・松・多年木・宇竹・眞前等の草木あり。

弓ヶ浜半島にある粟島神社の丘(二八m)。当時は島であったことがわかる。



松島(左)と粟島神社のある丘

美佐嶋。周り二百六十歩、高さ四丈あり。椎・櫛・茅・葦・都波・齊頭高あり。

和田多鼻の東の和名鼻で、ここも島だった。

戸江割。郡家の正東二十里一百八十歩なり。嶋に非ず。陸地の濱のみ。伯耆の國郡の内なる夜見嶋と相向かんとする間なり。

美保関町森山の古閑。「割」は交通を取り締まった所。関合はその名残と考えられる。対岸は伯耆国で、交通の要所であったため監視所を置いた。

栗江崎。夜見嶋に相向ふ。促戸の渡は二百一十六歩なり。崎の西は入海の堺なり。

美保関町森山横田神社の南方の岡鼻であった。

安来駅の北側にそびえる十神山(九二m)。現在は陸続きだが、当時は島であった。松江方面から安来に向かうと、市街手前から美しい姿を見せる。山頂には石棺を持つ古墳(十神山古墳)があり、中世には山城として利用された。

加茂嶋。既に磯なり。

安来市安来港北の亀島(安来港より撮影)

十神山(安来港より撮影)



蛭嶋。周り一十八里一百歩、高さ三丈あり。(中略)即ち牧あり。陸を去るに三里なり。

蛭嶋。周り五里一百三十歩、高さ二丈あり。(後略)

蛭嶋は中海に浮かぶ大根島を指す。現在、薬用人参やボタンの産地として有名だが、当時から土が肥えていたことがわかる。牧とは当時の軍団で使用する馬や牛を飼った官立牧場のこと。高低差の少ない広々とした島で、牛馬が飼われていた様子が想像できる。



上空から大根島・江島を望む

松江市大井町。手前は中海(中海大橋付近より撮影)



蛭嶋は大根島北東の江島を指す。現在は水門と堤防により、大根島弓ヶ浜と陸続きだ。埋め立て前は、むかでのような格好をしていたらしい。

羽嶋。樺・比佐木・多年木・蕨・齊頭高あり。

安来市飯島町、権現山で、頂上には羽鳥神社がある。飯梨川が上流から多くの砂を流し込んだため、現在はまわりが陸地化している。近世、盛んに行われた、たたら製鉄のため、鉄穴流しも大きく影響している(詳しくは二巻を参照)。

飯島の丘(安来市飯島より撮影)



穴道湖・中海の生き

『出雲国風土記』の秋鹿郡の条に書かれた「入海」は穴道湖を島根郡の条に書かれた南の入海は、中海を指しています。当時食用とされた魚や秋の渡り鳥などを中心に数多くの生き物が記載され、入鹿(ルカ)和爾(サメ)を除くと、多くは現在も見られます。また、海鼠はマコという海松はミルという海中の岩石に着生する海藻のことで、塩分濃度が低くなったせいか、現在、穴道湖や中海ではほとんど見られません。

須受積(すずき) スズキのこと。セイゴ・ハネなどとも言う。成長するにつれ、呼び名が変わる「出世魚」。濡れた和紙にくんで蒸し焼きにする「奉書焼き」は、島根県の有名な郷土料理。

鱈(えび) テナガエビ・モロゲエビなどの総称で、種類が多い。秋のモロゲエビ(ヨシエビ)は、穴道湖七珍の一つだが減少が著しく、テナガエビで代用されることが多い。

白魚(しらを) シラウオのこと。産卵期は春。おもにプランクトン動物を食べて成長し、一年で死ぬ。初春のシラウオは、穴道湖七珍の一つ。

鵜(たかべ) コガモのこと。秋、日本を通過する南方にわたり、春、また北方に帰る。天然記念物で、穴道湖はわが国でも有数の飛来地。

白鵞(くくい) ハクチョウのこと。冬になると現在も穴道湖・中海に飛来し、その優雅な姿を見せる。また穴道湖は、コハクチョウの南限飛来地、学術上注目されている。



写真はすべて佐藤仁志氏の提供による